

令和6年度

関係人口創出・拡大のための対流促進事業
(中間支援組織の提案型モデル事業)

事業の実施結果
(概要)

団体名	特定非営利活動法人 新川田箆環境資産保全研究会 (NPO法人 RAS研究会)
採択テーマ	棚田
事業名	棚田とマイクロファーム層とのマッチング事業を通じた 関係人口の創出と強化

- ・狭小で耕作に手間のかかる棚田と、一から自分の食べるお米を作りたいと望む「マイクロファーム層」のマッチングを図り、自立した耕作によって地元負担の少ない棚田保全活動を行なうプログラム「うちの棚田」を構築する。
- ・プログラム精査および環境整備を、すでに地域とつながりのある関係人口である「棚田まなび隊」との共同で実施することで、関わりの段階のステップアップを図る。

1. 取組の目的

- ・ 近年急激に失われていく棚田を、都市民の自律的な通い耕作によって維持する仕組みを作る。
- ・ 実践的な仕組みづくりの活動を通じて地域との関わりを深める。

2. 取組の概要

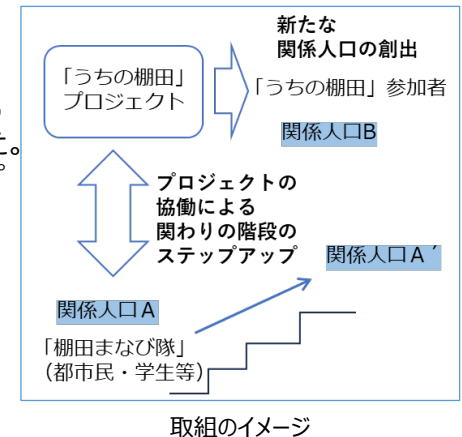
- ・ 空家および休耕田を活用したプログラムを企画していくために、環境づくりワークショップを行った。
- ・ 耕作や地域行事参加の実践について検証した。

3. 取組の成果・地域への影響

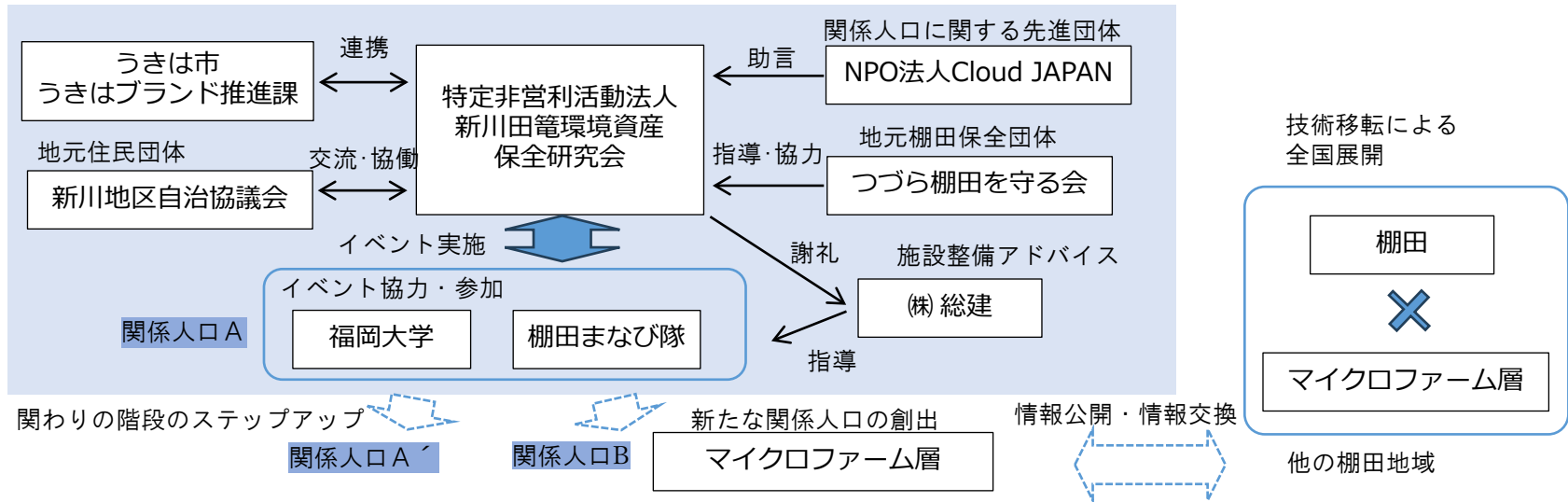
- ・ ワークショップ参加者は伝統的な建築や地域への理解を深め、敬意や愛着が強まった。
- ・ ワークショップを通じて地域住民のシビックプライドを育むことに繋がった。

4. 事業を通じて得られた気づきや知見

- ・ 棚田耕作について予想を上回る困難な状況を体感した。
- ・ 地域の人的資源のポテンシャルを実感した。



事業スキーム



Action 1 : 「うちの棚田」プロジェクトの始動

概要

- 都市居住のマイクロファーム層の通い耕作によって棚田保全を図る「うちの棚田」プロジェクトについて検討する。
- 年間を通じたプログラムの検証を行うために休耕田を復田して耕作を行い、課題を精査する。

成果

- 日常管理は2～3名（50代以上）で実施し、一斉草刈りや稲刈り際には5～6名（20代～40代）の参加者と耕作を行なった。不耕起が長かったため、土がやせていること、水利システムが老朽化していることなど、現状が明らかになった。
- 農作業を通じて、準備すべき用具、休憩場所の確保など、クリアすべき項目の洗い出しができた。

参加者や地域の声

- 参加者（都市部住民等）からは、「復田から耕作を行うことの困難を実感した」との声が聞かれた。
- 地域住民からは、「この棚田は近隣からもよく見えて、荒廃が気になっていた。耕作してもらえるのはありがたい」と言っていたが、いろいろと助言をいただくことができた。

得られた気づきや知見

- 営農の困難に加え、害獣被害にあうなど、収穫は芳しくなかったものの、その都度地元の農家の方に相談し、教を乞うことで密なコミュニケーションを図ることができた。



棚田耕作の試行



空家改修イベント（床張り）



空家改修イベント（漆喰塗り）



棚田復田イベントで3枚の棚田を復田

Action 2 : 拠点づくりを通じた関係人口のステップアップ

概要

- 「うちの棚田」プロジェクトの拠点施設として地域内の空家を活用することとし、下記のようなイベントを実施した。
 - ① 空家改修イベント：地元の大工さんの指導を仰ぎながら、共同で空家の改修を行なった。
 - ② 棚田復田イベント：竹が生えてしまっている棚田を耕作可能な状態に復田した。
 - ③ 交流広場整地イベント：雑木が繁茂したり、廃材などが放置されている土地を、交流できる広場に整地した。

成果

- イベント①は20代の参加者を中心に22名、②は60代を中心に11名、③は4～50代を中心に7名の参加者があった。空家の改修や復田などをイベントとして行うことで、参加者の関心を引き、同時に施設や空間への愛着を高めることができた。

参加者や地域の声

- 参加者（都市部住民等）からは、「空家の改修では、普段できない経験ができた」「自分でも改修などできることが分かった」「地元の方の知恵や経験を学べた」と好評だった。
- 地域住民からは、「若い人がたくさん関わってくれて希望がもてた」と喜ばれた。

得られた気づきや知見

- 単なる交流にとどまらず、地域の方との共同作業とすることで課題への取組が共有され、より深い関わりを持つことができた。

1. 取組の自立・自走化を図る上での課題

- 参加者の成功体験を生むために、一定の安定した収量が得られるような営農にしていくことが必要である。それに向けて、今後も地域の農家の方に教えを乞いながら進めていくことを考えている。
- 事業の自立・自走化を図るためには、利用者が自身でプログラム進行できるようなメンテナンスフリー化を進めていかなければならない。また、地元農家の方にマネジメントのサポートをお願いできるよう協働の仕組みを検討する必要がある。
- 多様な楽しみが見出せるプログラムの多角的な企画や仕組みづくりが必要である。
- 事業を持続・発展させ、棚田の保全に寄与するために、毎年参加者を募集し、学習田を拡大しながらプログラムを進めることが望まれる。

2. 次年度以降の事業展開

- 今年度事業の成果をもとに、次年度は、本格的に「うちの棚田」プログラムを開始し、年間15日程度訪問する機会を設ける。プログラムにおいては参加者1組に1枚の棚田を割当て、自分の棚田という実感を強める。
- 2025年度生については既に参加者募集を開始しており、定員を満たしている状況にある。
- 草刈りなどの地域行事が行われる前日にイベントを開催し、行事参加への誘導を図るものとする。
- 拠点での宿泊について積極的に利用したいという声もあるため、民泊利用などの可能性についても検討する。



3. 自立・自走化に向けた収支計画の概略

- 令和7年度はモニターということで「うちの棚田」会員の会費収入は多く見込んでいない。
- 令和7年度中にイベントを定着させ、令和8年度からの収入の安定化を図っていくものとする。
- 令和9年度にはさらに復田を図り、翌年以降の「うちの棚田」参加者の増加を見込むと同時に、卒業生の耕作の場を拡大していく。
- 令和10年度以降も棚田保全に向けた取組を継続する。

	費目	R 7	R 8	R 9
支出	消耗品 (農業資材・イベント関連)	50千円	50千円	50千円
	維持管理費	100千円	100千円	100千円
	指導等謝金	50千円	200千円	200千円
収入	会費収入	20千円	90千円	90千円
	イベント収入	200千円	300千円	300千円